

おはようって言ってきた彼のアレが 挨拶するより前にINされてて朝から 性欲丸出しセックスが止まらない

体験版

性欲強め甘々お兄さん×気だるげ流され体質青年

受け：悠太（ゆうた）

攻め：遥馬（はるま）

要素：即ハメ、焦らし、前立腺責め、連続絶頂、対面座位、乳首責め、言葉責め

夜に散々、それはもう散々ヤった。ギリギリ終わる瞬間まで意識はあったものの、ほぼ即寝を決めた、そのあくる朝。重い腰に生まれた違和感で目を覚ますと、自分の視界の先に恋人の姿があった。

「おはよう悠太」

にこりと笑いかけてくる遥馬は、ごくごく自然に挨拶してくる。ただ、本来横に寝ている彼を見るためには、首を横に向けないと目が合わないはずだ。それなのになぜ、仰向けの俺の真上にいるのか。

答えは下半身に発生している違和感とも関係していた。

「っ、お、おはよ、って、遥馬、なに、入れてっ」

「悠太が無防備に寝てるなあって思ったら、つい」

「ん、っ、だ、誰でも寝てる時は無防備だろ！あ、や、嫌だって、昨日もあんなに」

「そうだね。ここ、まだ柔らかい」

「んあああっ...！！？」

ぐっと足を持ち上げられて、遥馬が腰を奥まで進める。ゴリゴリと中を挟られる感覚は、昨日の夜も味わった。自分だけでは起こせない刺激は、朝にしては過激すぎる。

まさか昨晚3回戦まで行っておきながら、朝っぱらから開幕戦もあるとは思っていなかった。俺は遥馬の性欲を見くびっていたのかもしれない。いや、いっそ見誤った分はいい。どちらかという問題なのは、俺の合意なく既に行為が始まっていることじゃないのか。なんで許可なく入れたんだと、寝起きで動きにくい身体をひねって、遥馬の身体を押し返す。

「く、う、だめ、だ、朝からなんて...っ！」

「付き合ってる同士なら、みんな朝からエッチしてるよ？」

「み、んな、してても、俺はっ」

「でも起きる前の悠太は、好きなとこ擦ってあげたら喜んでたけど」

「は、あ、あっ、や、そこっ...！ん、ううっ、やめっ、ん、んっ、あ、あああああ...ッ！」

でも完全に覚醒している遥馬と俺では、力に差がある。もちろん体勢の有利不利もある。だから腰を掴まれて前立腺を狙い撃ちされたら、ビリビリと背中に快感が駆け抜けていって、ただでさえぼうっとする頭が余計に回らなくなった。膨らんだ先端で、過敏になったしこりをコリコリと押されると足がビクつく。ぐっと喉が反って、甘い声が漏れてしまう。快感から逃げようともがいても、しっかりと位置を固定されていてずらせない。

「ひんっ、んっ、あ、や、やっ、違うとこ、当てろ...！んく、う、も、やああ...っ！」

「そんなこと言われたら、もっとグリグリしたくなっちゃうよ？」

「〜〜っ！！あああ、ッん、んん、んゝ〜〜っ！」

まだ目が覚めたばかりなのに、情報が多すぎる。処理するのが面倒になった脳が、気持ちよければなんでもいいんじゃないか？と、考えることを放棄し始めかけているのもよくない。ダメだダメだ、絶対によくない流れだぞ。このまま遥馬が、一発ヤッて終わってくれたらいい。だけど今までの付き合いの中で、遥馬が機嫌よく1回で終わったことなんかないんだ。

それに俺も、あまりしつこくされると辛い。昨日の名残で、中はまだ感じやすくなっている。射精なしでもイける身体は、気持ちよさが一定を超えたら中だけの刺激で達してしまう。まずい、このままじゃまずいと枕を握りしめて首を振った。だけどその仕草が既に、イク手前のやせ我慢であることもバレている。

「んはっ、はっ、はううう...！っひ、あ、だめ、もうだめ...ッ！ああああやだやだやだああっ！」

「中気持ちいい？もうイキそう？」

「ッ！あ、あ、や、だめ、だめだめ、イッたら、俺...！」

「そうだね。悠太は一回中イキしちゃったら、あとはふにゃふにゃになっちゃうもんね」

「んふっ、ふっ、ふう、んんううう...！！っあゝ、あ！？や、まっ、あ、ひああああッ！！」

理性を保て、どうにか耐えろと、俺は身を固めてどうにか絶頂を堪えていた。でもこういう時に限って、遥馬は優しく全身をまさぐってきたりする。そのくすぐったいような、気持ちいいような感覚にゾクゾクしていると、固めていた気持ちと身体が揺らいで、抑えていた快感がぶわっと内側から広がっていく。

あ、これはよくないと思ってからでは遅いんだ。ぎゅっと抱きしめられて、絶対に快感を逃がせない状態にされてから、淡々といい場所だけに腰を打ち付けられてしまった。俺を必ず絶頂に導くための腰使いに、思わず手と足を巻きつけてしまった自分が腹立たしい。

「んああああっ！あっ、あ、あ、ん、や、遥馬、あ、イク、イク、無理、もお...
っ！」

「うん、うん、イッて？俺のことぎゅうしながらイッていいよ？」

「んんんゝんゝンン...！！っは、あゝ、あ、っひ、ツく、あ、イクイク、うう、
————ッあああああああ！！」

自ら限界を引き延ばしていたせいもあって、イクと思ってからはあっという間だった。ぎゅうう、と遥馬に抱きついたまま、全身が大きく波打つ。ビク、ビクと俺が震えるのに合わせて、中もきつく締まった。それに合わせて息を詰めた遥馬も、俺の中に精液を放っている。2人で一緒に達する気持ちよさに、俺はすっかり心を溶かしていた。

さっきまでは、これで終わるわけがないから我慢していたというのに。快感に流された頭では、大事なことを思い出せなくなってしまう。

「んん...！あ、は、遥馬、遥馬あ...」

「ふふ。イッた後の悠太は甘えたでかわいいね？」

「ふあ...！」

物欲しげにヒクつく中を堪能してから、遥馬は自分の熱を引き抜いた。それでも深い絶頂の余韻で、痙攣が止まらない。どうにか彼に抱きつきながら息を整える。横に寝転んだ遥馬は、息の荒い俺を軽く抱きしめて頭を撫でてくれるから、ほっとして甘えてしまった。

じくじくと中が疼いている。やっぱり中でイクのは、こうなるからよくない。収まるまで時間がかかるし、なんだか身体の芯からじっくり燃えるような熱が引き切らない。普通にイッた方が、瞬間的に沸騰して、頂点からすぐに戻る気がして楽だ。

「まだ収まらない？」

「ん、中で、イッたから...」

「中イキした悠太は、いつもと比べてもエッチに感じる」

「んひうっ!？」

でも、時間をかければ徐々に落ち着いていくはずなんだ。だから俺はゆっくりとした余韻を噛みしめていたのに、遥馬はそうじゃなかった。

ひくり、ひくりと収縮を繰り返していた孔に、ぬるんと1本指が入ってくる。その指が、ただ精液をかき出すために入って、すぐに抜けていくならいい。だけれど俺の期待を裏切る指先は、すぐに前立腺を見つけて、淡く淡くその上を滑る。

「あふ、うう、ん、だめ、だめ、遥馬あ...!」

「何がダメ？」

「まだ、まだ中が...! じんじん、してるからっ」

「確かにさっき入れた時より、きゅんきゅんしてるかも。やらしいことになってるね？」

「んゝ あああああっ...!!? ひ、い、いや、やああっ!!」

ぬるる、ぬるる、としこりの周りで円を描く指先に、否が応でも意識が向く。やめてくれと訴えても、楽しそうな遥馬は首筋を舐めたりしていて、明らかに真面目に会話をする気がなかった。ふざけんな、夜からの延長で考えたら4回戦を終えたところなんだぞ。加減しろ、殺す気かと彼の二の腕を握ったものの、指が追加されて、2本の指でバラバラに引っかかれたら言葉が出なくなった。

重なる絶頂で過敏になったしこりを、二本の指が引っかいては叩く刺激に、俺の身体が大きくしなる。指から逃げたがる俺を、遥馬はもちろん離してくれない。

「んんんっ！！んや、ああ、まっ、だめ、もう無理っ、無理だからっ！！」

「無理でも終わってあげないよ？このままもう一回イカせちゃう」

「んうあゝ...ッッ！！あ、ひ———...っ！！！！？」

一度中でイッた後は、連続で中イキしやすくなる。その事実を俺に教え込んだのは、まぎれもなく目の前の男だ。教えた張本人なのだから、俺がどうしたらイクかも当然分かっている。

しつこく前立腺を引っかかれてから、ぐぐっと強く押されると、もうダメだった。頭が弾けて、ビクンと上半身が後ろにしなる。後頭部に回された手が悪戯に耳の下をくすぐろうものなら、身体の快感中枢が更に狂った。バチバチっと視界が真っ白になって、息が止まる。

「か、は.....ッッ！！あう、うう、うゝ〜〜〜...っ！！？」

「ああ、イっちゃった。全然我慢できなくてかわいいね。もっとイってもいいよ？」

「っ、ひ、い、いい、も、終わりっ」

「ほらいきな？」

「ンンんぐっっ！！！！？」

でも遥馬は、俺を一回イカせるだけでは満足しなかった。震える前立腺を、今度
は三本の指がいじめてくる。なんで増やすんだよ、もういらないのでと首を振っ
たら、口さえもキスで塞がれた。拒絶すら許されなくて、俺は立て続けにもう一
回絶頂を迎えてしまう。

「んふううう...っ！！ふぐっ、ッ、ン`~~~~ツツ！！」

「またイッた？気持ちよくてもうイッちゃったの？」

「ん、んんっ、イッ、た、イッたから、もお...！」

「ふふ。やだやだってなってる。その顔がかわいいから、まだまだ終われない
なあ？」

「ううう`んっ！んは、あ、だめ、だめえええ...ツツ！！もおいしい、もっ、ん、
んむっ、う、ううううンンンっっ！！」

イッて収縮する内部を、強引に広げる指先が意地悪だ。くにくにと前立腺を揉ん
ではこねて、時には強めに擦ってくる。しかもイッている最中に刺激を重ねられ
たら、絶対に我慢できない。ダメだ、こんなにイッたら力が入らなくなる。なし
崩しに遥馬の言いなりにされてしまう。なのに拒むことすらできないキスで、言
語まで奪われている。

まずい、本当にまずいと思っているうちに、俺は何度中でイカされたんだろう。
キスから解放されても、呼吸することに必死で会話どころじゃない。

「ふはあ...！あ、あ、あう...！」

「イキすぎて喋れない？」

「っひ、あ、も、お、俺、もお...！」

「うんうん、ごめんね、指だけじゃ足りないね？」

「ッ、ちが、う、や、やえ、で」

でもまだ、喋れないだけならどうとでもなった。問題なのは、横向きの俺の身体をそのままに、遥馬が膝立ちになって、いきり立った自身を押し付けてきたことだ。嘘だろ、入れんのかよ、ここまでイかせまくった後に入れるのは無しだろと、彼の手首を掴んだ。なのにその手を逆に掴まれて、手の甲にキスをされてしまう。

ぬり、ぬり、と、太ももの内側や臀部に熱い切っ先が当たっている。明らかに位置を調整している先端が入らないよう、俺もどうにか身をよじって逃れていた。

「んや、も、嫌だ...！夜、にっ...！夜に、また」

「どうして悠太はたくさん気持ちよくなったのに、俺はだめなの？」

「そ、れは、遥馬がするからっ」

「俺だって、こんなにエッチな悠太を見せつけられて待てができるわけないよ。
それに悠太の下のお口は、さっきから寂しがってる」

「うあああああっ！！？」

だけれど、俺の些細な抵抗くらいで逃がしてくれるほど、遥馬はいい奴じゃなかった。むしろ俺をクタクタにさせたのは彼なのだから、悪意があって当然ともいえる。ちょこまかと動く俺に焦れた遥馬は、とうとうしっかりと俺の腰を掴んで、ずぶっと一息に彼の熱を挿入してきた。哀れなくらい言いなりな俺は、入れられたらもうどうすることもできない。

指でじっくり高められた場所は、遥馬の熱が入っただけでも軽くイッた気がする。なんだよこれ、擦られる度にイッてたら話にならないぞと、枕やシーツを握って首を振った。

「んは、あ、あああああゝ...！ああふっ、ん、んんんう...！」

「トロトロの悠太って、色っぽいかawaiiさがあるよね。俺、イキ過ぎてどうしようもなくなってる悠太って大好き」

「はあ、はあ、はあう、うう、んゝンン...！っひ、あ、や、やああああっ...！」

本当はもっと早く腰を動かせる遥馬が、あえてゆったりと抜き差しを繰り返している。過敏すぎるくらいの中をまんべんなく擦られていく感覚がたまらなくて、思わず熱っぽい息が零れていた。ついうっかり、「気持ちいい」とか、「もっと」と口走りそうになったときは、やらしい思考に汚染されないように必死だった。それなのに遥馬ときたら、先走りまみれの俺の熱を弄ってきたりするから、増々混乱は深まっていく。

「ふああああッ！あああ、あ、だめ、一緒、だめえ...ッ！」

「悠太のここもぬるぬるだ。こっちではイケてないから切ないのかな？」

「んふ、う、うううう...！ふああ、あ、やっ、先、先のとこ、しちゃ、あ、あゝ...っっ！」

くちくちと尿道のあたりを狙って指の腹で撫でられると、ゾクゾクゾクっと腰がわなないた。反射で中を思い切り締め付けてしまって、それが俺を余計に苦しめる。ひとつが気持ちよくなると、他も相乗効果で快感が重くなるなんて、どんな罰ゲームなんだ。

ぬるぬるの先っぽに関しては、わざとローションが落とされて、もっとやらしい状態にされてからいじめられた。ちゅこちゅこと亀頭を集中的に扱かれると、感じすぎて暴れずにはいられなくなる。

「ひんんうううッ！！いや、あ、やあああああっ！」

「すごい感じ方してる。ほら、抜けちゃうから逃げないで」

「んも、無理、無理いっ！！しないでっ、あ、来ちゃ、う、どっちも、どっちもお...っ！」

「両方でイッちゃいそう？いいよ、なら中もいいとこゴシゴシしてあげる」

「~~~~ッッああああ！！ああああだめだめ、イク、イク、っひ、ぎ、~~~~っあああうううう！！！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー